

# 私の好きな六条御息所

源氏物語の人々 6

## 恋のライバル葬る激しい女性

白石加代子さん

俳優



六条御息所を演じるなら、白石加代子とよく言われます。生き霊、死霊となつて恋のライバルを葬る激しい女性。それが適役と言われると、うれしいうな、うれしくないうな。

実際、02年から続く朗読劇「源氏物語」の一部で演じています。高位の女性、知的で洗練された絶世の美女。この完璧な女性が崩れていく。

「賢木」の野宮は好きな別れの場面。葵の上をひきまきまぐり、うちかなくぐりして悶絶死させた女性が、ここで

は柵を前にじっと光源氏と対峙。感情を抑制し、涙をまぶたのふちにこらえながら、歌をやりとりするのが美しい。「澤標」の厄削ぎの姿がまた美しい。源氏に娘を頼むと言いつつ、恋の相手として接しないでと懇願する。

登場人物中、最もすてきな方と想って取り組んでいます。でも、源氏という不良にめぐりあわなければ、幸せな生活を送ったかもしれない。ただ、女として好きとはいえません。私は、むしろ能天気な方なので、どういふ方

のかとまきまぐり続けた。

ご自分のうちに鬼がいることに気づいてしまったからこそ、魔界に身を落としたのかもしれません。生きても地獄、死んでも地獄。おかわいそうに、お苦しみだったでしょう。

「源氏物語」は、美しくきらびやかでみやびな色恋の世界で、耳目を集めますが、その奥で人間という愚かな存在をあざ笑っている。人間の怖さを突きつける。死もきっちり書く。人生の行く末も考えさせる。ずーっと源氏にまとわりつき、かかわるものを劇的に変える御息所が、もしいなかったら、物語が異次元にまで広がらず、薄っぺらになっていたでしょうね。(談)